

論文の内容の要旨

氏名：金井尊史

博士専攻分野の名称：博士（国際関係）

論文題名：「ソ連版電撃戦」の嚆矢としてのノモンハン事件

1 研究目的

本研究の目的は1939（昭和14）年5月から9月にかけての約5か月間にわたりモンゴル人民共和国と満州国の国境を擁するハルハ河周辺地域において日本軍とソビエト連邦軍（ソ連軍）が大規模に衝突したノモンハン事件を、ソ連版電撃戦の戦場における最初の実証であったと位置付け、ノモンハン事件の新たな見方を構築することである。

ノモンハン事件は日ソ両軍が大規模に衝突した数少ない事例であるが、その稀少さからこれまで多数の先行研究が発表されてきた。しかしながら、それらは一様にノモンハン事件を大規模化した国境紛争として取り上げ、その見方も近代的な機械化部隊を擁したソ連軍に日本軍が大敗を喫し、近代戦の洗礼を浴びた戦いとするものであった。それはソ連側史料が使用できなかった状況下で日本側の史料に基づき研究が行われてきたためであり、ソ連崩壊によってソ連側史料が使用できる状況になった現在、それらを分析してノモンハン事件の再検討を行い、日ソ両国側からの真相の解明と新たな見方の提示が必要であると考えられる。

2 仮説・先行業績との関連及び論文の意義

（1） 仮説・先行業績との関連

本論文ではノモンハン事件とほぼ同時期に確立された縦深作戦理論がソ連版電撃戦であったと位置付け、1939年8月20日に発起された8月攻勢が、ソ連版電撃戦の戦場における最初の実証であったと仮説を立てて論証を行う。

縦深作戦理論は、後にソ連軍参謀総長となるミハイル・トゥハチェフスキー（**Михаил Николаевич Тухачевский**）らによって提唱された作戦戦略であり、敵に対して圧倒的に優勢な兵力を投入し、敵の対処能力を上回る破壊力・機動力を持った大部隊の連続した攻撃で速やかに包囲環を形成し、敵野戦軍の殲滅を目指したものである。また、その特色は航空部隊と砲兵部隊の敵陣地全面に対する濃密な砲爆撃下で戦車を主力とした諸兵科連合機械化部隊が行動する点であった。

縦深作戦理論をソ連版電撃戦であると位置付けるにあたって、本論文では第二次世界大戦におけるドイツ軍が採用した作戦戦略である電撃戦理論に着目した。電撃戦理論は後にドイツ陸軍参謀総長となるハインツ・グデーリアン（**Heinz Wilhelm Guderian**）らによって確立され、その特色は快速の戦車を主力とした装甲部隊と急降下爆撃機を擁した航空部隊が無線通信による緊密な協力のもと敵の弱点を突破し、高い進撃速度を維持して短期間で戦捷の獲得を志向した点であった。第二次世界大戦初頭にドイツ軍は電撃戦理論に基づく作戦を実行し、それまでにない短期間でヨーロッパ各国を支配下におさめた。

縦深作戦理論と電撃戦理論は、ともに装甲機動戦理論を提唱したジョン・フレデリック・チャールズ・フルー（**John Frederick Charles Fuller**）の著作に強く影響されており、航空部隊の支援下で戦車を中心とした部隊を集中的に運用し、高い機動力を発揮して戦略レベルでの大突破の後に敵野戦軍を迅速に包囲殲滅するという共通点が認められる。

本論文では、独ソ両国が行った軍事協力に着目した。1922年に独ソ両国間で締結されたラパッコ条約は、締結直後に調印された付属条項では独ソ両国の秘密軍事協力が盛り込まれた。これに基づき独ソ両国は緊密な軍事協力を行い、ドイツ領内で開発や訓練を行うことができなかった戦車・航空機の研究機関と軍需工場をソ連領内に開設して研究と教育を行い、その成果を独ソ両国で共有した。また、ソ連側はソ連軍人をドイツ軍参謀本部へ留学させ、ドイツの近代的な軍

事学を吸収した。

独ソの軍事協力によってドイツへ留学して教育を受けたイエロニム・ウボレビッチ (**И е р о н и м П е т р о в и ч У б о р е в и ч**) は後に白ロシア軍管区司令官として機械化部隊運用の研究を行った人物であり、1937年には赤軍大粛清で縦深作戦理論を提唱したトハチェフスキー、同じくドイツ留学経験者であるイオナ・ヤキール (**И о н а Э м м а н у и л о в и ч Я к и р**) らと共に逮捕、処刑されている。

ノモンハン事件に関する先行研究はこれまで多数発表されてきた。1969年に防衛庁防衛研修所戦史室(当時)が刊行した『戦史叢書 関東軍(1) 対ソ戦備・ノモンハン事件』は日本の公刊戦史であり、防衛研修所が所蔵する一次史料に基づき一連の対ソ戦備と国境紛争の経緯を明治時代から詳述しており、ノモンハン事件についても日本軍の軍事行動を中心に詳述しており、ノモンハン事件研究における基礎文献である。

1989年のアルヴィン・D・クックス (Alvin D. Coox) による『ノモンハン - 草原の日ソ戦 1939』は、史料、及び当事者からのインタビューを多数使用しており、最も権威ある研究書とされている。

上記の文献はソ連側史料が使用できない状況下で、日本側史料に基づいて論証されたものであるが、ソ連側史料が使用できるようになった近年、新たなノモンハン事件の見方を提示する研究が発表されている。

2013年の岩城成幸による『ノモンハン事件の虚像と実像 - 日露の文献で読み解くその深層』はノモンハン事件の研究史を概観し、それまで顧みられることの少なかった諜報戦や第1集団軍司令官ゲオルギー・ジュコフ (**Г е о р г и й К о н с т а н т и н о в и ч Ж у к о в**) と戦線軍集団司令官グリゴリー・シュテルン (**Г р и г о р и й М и х а й л о в и ч Ш т е р н**) の確執なども取り上げ、新たな見方を示唆している。

同じく2013年のスチュアート・D・ゴールドマン (Stuart D. Goldman) による『ノモンハン1939 - 第二次世界大戦の知られざる始点 -』は、ノモンハン事件を第二次世界大戦の開始点であると位置づけている。

2014年の秦 郁彦による『明と暗のノモンハン戦史』はこれまでの研究成果に加えてソ連側史料に基づく日ソ両軍の人的・物的損害に言及し、ノモンハン事件を総括している。

ソ連崩壊前のソ連側先行研究では1976年に刊行された『ソ連軍事大事典 (**С о в е т с к а я В о е н н а я Э н ц и к л о п е д и я**) 第8巻』でノモンハン事件に言及しているが、時代背景からソ連共産党のプロパガンダである可能性が高く、内容の検討が必要である。

ソ連崩壊後である2010年にロシアで発表されたE.A. ゴルブノフ (**Е в г е н и й А л е к с а н д р о в и ч Г о р б у н о в**) による『東部国境 (**В о с т о ч н ый Р у б е ж**)』は、ソ連から見た日ソ国境紛争を扱っており、ノモンハン事件に関しても国境紛争の一環として詳述している。

以上のように、日ソ・日露両国を中心に多数の先行研究が発表されたものの、ソ連軍の作戦戦略に着目し、ノモンハン事件がソ連版電撃戦の実戦における最初の実証であったと位置づける研究は皆無である。

本論文は上記のノモンハン事件ソ連版電撃戦の実戦における最初の実証であったと位置づけ、先行研究に加えて未公開のソ連側一次史料を使って論証する。

(2) 論文の意義

本論文の意義はノモンハン事件がソ連版電撃戦の戦場における最初の実証であることを、ソ連側史料を用いて論証することで、ノモンハン事件の新たな見方を構築し、ノモンハン事件の研究に新たな知見を切り開くことである。

第二次世界大戦は装甲機動戦という新しい軍事ドクトリンを確立した戦争であったが、装甲機動戦の確立はドイツ軍によるものと考えられてきた。第二次世界大戦の開戦直前である1939年の段階でソ連軍が実戦で装甲機動戦を実施していたことが立証されたならば、ノモンハン事件の大規模化した単なる国境紛争という見方は大きく変化し、新たな見方を提示することができる。

また、本論文で使用した史料の大部分はこれまで日本では使用されてこなかった未公開のソ連側史料であり、それらの史料から導き出される知見は停滞しているノモンハン事件研究の進展に大きく貢献するものであると考える。

3 論文の構成

本論文の具体的な構成は次のとおりである。

I 序論

- (1) 本論文の目的と意義
- (2) 先行研究
- (3) 史料及び研究方法
- (4) 本論文の構成

II 本論

第1章：電撃戦理論

- (1) 電撃戦理論とは何か
- (2) 電撃戦理論の誕生
- (3) ドイツの電撃戦

第2章：ソ連版電撃戦

- (1) 独ソの軍事協力
- (2) 『1936年版赤軍野外教令』
- (3) ジューコフの機動戦に関する認識
- (4) ポーランド東部への侵攻

第3章：日ソ国境紛争

- (1) 満州国の建国と国境問題
- (2) 国境紛争
- (3) 張鼓峰事件

第4章：ノモンハン事件（1）

- (1) ノモンハン事件の発端と5月の戦闘
- (2) 7月の戦闘
- (3) 第1集団軍と戦線軍集団の編成

第5章：8月攻勢（2）

- (1) 作戦計画の策定
- (2) 作戦準備
- (3) 戦闘経過

III 結論

註

史料

参考文献

4 史料

本論文は主にモスクワのロシア国立軍事公文書館が所蔵する以下の史料を使用する。

ノモンハン作戦全般報告（戦線軍集団司令官シュテルンの報告）

（PГBA, Ф32113, О1, Д1, Л1-80）

ノモンハン作戦全般報告（第1軍集団司令官ジューコフの報告）

（PおГBA, Ф32113, О1, Д2, Л1-166）

第1軍集団作戦日誌①（モンゴル国境第7地区における日満軍の挑発行為）

（PГBA, Ф32113, О1, Д230, Л1-85）

ノモンハン事件軍事行動記録 第1巻

(РГВА, Ф 3 2 1 1 3, О 1, Д 2 3 5, Л 1 - 1 3 2)

ノモンハン事件軍事行動記録第2巻

(РГВА, Ф 3 2 1 1 3, О 1, Д 2 3 6, Л 1 - 1 4 1)

ノモンハン事件軍事行動記録第4巻

(РГВА, Ф 3 2 1 1 3, О 1, Д 2 3 8, Л 1 - 1 5 1)

ノモンハン事件軍事行動各種報告

(РГВА, Ф 3 2 1 1 3, О 1, Д 6 7 2, Л 2 3 - 5 7 0)

第二次ノモンハン事件作戦行動記録

(РГВА, Ф 3 2 1 1 3, О 1, Д 6 7 5, Л 1 - 5 8)